

THE 茶内小 TIMES

令和4年(2022年)4月18日発行 VOL 3

「Society 5.0 時代」を生き抜くために

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

2年前のちょうど今頃、学校は大混乱に陥っていました。新型コロナウイルス感染症が日本全国に蔓延し、卒業式や入学式は入場制限や分散実施、短縮などの措置が取られる中で実施されました。新型コロナウイルスの感染に怯えながら新学期が始まりましたが、国から全国の学校に休業が要請され、約2ヶ月にわたり、全国の学校のほとんどが休業を余儀なくされました。

学校での授業がなくなり、この間の子どもたちの「学び」はどうなっていたでしょうか。国のGIGAスクール構想(高速通信ネットワークの配備、一人1台の端末の配付など)が始まる1年前であり、端末を活用して学校と家庭を結んで双方向で授業を行っていた学校の割合は全国で約6%ほどでした。多くの学校では不十分なICT環境の中、教員が授業動画を作成しホームページ等で公開したり、大量のプリントを配付し回収し、丁寧にコメントを記入して返却したりするなど、何とか子どもたちの学びを保障しようと奮闘していました。学校の側から見れば、できる限りのことを精一杯取り組んでいると評価されますが、子どもの側から見ると、深刻な課題が見えてきます。つまり、何も与えられなければ勉強ができない、自ら課題を見付けることすらできないなど、子どもたちの自学する力や主体的に学ぼうとする意欲等が弱かったという事実が明らかになりました。

全国各地の小・中学校、義務教育学校が、学校経営方針(グランドデザイン)や学校経営計画の中に、「進んで学ぶ子どもの育成」や「自ら課題を見付け、主体的に判断し、行動する生徒を育てる」などと、目指す子どもの姿(育成すべき資質・能力)を掲げながら、半ば、絵空事であったことが露呈したこともありました。

水川和彦教授(岐阜聖徳学園大学)は、岐阜市での審議会(公教育検討会議)で次のように述べています。

子どもたちが「自分の時間」をつくる力が不足していることが顕在化した。「宿題」という考え方ではなく「自分で計画する」という学習の力が不足していることを、これからの学習に生かす必要がある。ゲームやテレビに没頭するという問題は、裏返せば「自分で目標を立てて取り組む力」の不足と同値である。岐阜市の子どもたちに、受け身でなく、「自分で決めて自分で探究する」という学びの力を育てることが、これからの教育には必須である。

本校の子どもたちが社会の主役になる2030年代から2040年代は、「Society 5.0(超スマート社会)」と呼ばれ、人間とAI(人工知能)が共存する社会です。高度な創造力が必要とされる仕事以外は、全てAIが行うと言われています。このような社会を子どもたちは生き抜いていかなければなりません。

今年度の本校の学校経営の目的(目指す子どもの姿)として、「自分の足で立ち、自分の頭で考え、他者と対話し協働できる子ども」を掲げ、その実現に向けて『子どもを育てる学校』から『子どもが育つ学校』へを学校経営理念としました。「子どもが育つ家庭」、「子どもが育つ地域」など、「子どもが主語」になる取組を学校、家庭、地域で仕掛けていきたいと思います。

